

令和 5 年 5 月 22 日現在

機関番号：12103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02067

研究課題名(和文) 我が国における鍼灸治療利用の実態と利用者の意識及び満足度に関する全国調査

研究課題名(英文) Nation wide survey on the utilization of acupuncture and moxibustion and satisfaction of the users.

研究代表者

石崎 直人 (Ishizaki, Naoto)

筑波技術大学・保健科学部・教授

研究者番号：90212878

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：我が国の鍼灸治療の利用状況と利用者の意識について、全国調査を実施した。有効回答数は1,207(30.2%)で、セルフケアも含めた過去1年以内の利用経験者は5.1%、過去全体では20.1%であった。経験者の利用目的は、腰痛(54.3%)、肩こり(37.0%)、膝痛(14.0%)の順で、これらの治療に満足した者の割合は、腰痛64.4%、肩こり70.0%、膝痛67.7%であった。治療経験者にCOVID-19の影響について尋ねた結果、「全く気にならない」が19.3%、「少し気になるが受療を受けたい」が43.9%、「状況を見て判断したい」が21.9%、「当面は治療を受けない」が14.0%であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、我が国で定着している伝統医療の一つである鍼灸治療の満足度が高いことを改めて示すものであり、業界が国民に提供するサービスの質向上に資するための基本的な情報として大きな意義を有する。特に我が国における愁訴の上位を占める腰痛や肩こりなどに対する鍼灸治療の満足度が高いことは、鍼灸治療の潜在的な有用性を示すものであり、補完代替医療としての価値を高めるものである。これらの資料は海外の研究者にとっても貴重な情報源となるとともに、日本における伝統医療の実態を広く国内外に発信するための資料となる。また、COVID-19の影響下における利用者の意識や動向の一部を示す資料としての意義も大きい。

研究成果の概要(英文)：We conducted a nation-wide survey research on utilization of acupuncture and moxibustion including aim and satisfaction of the users. Face-to-face interview was completed with individuals chosen by multi-stage stratified random sampling. Of 4,000 subjects visited, 1,207(30.2%) were eligible to fill the questionnaire. Those who had utilized acupuncture and/or moxibustion including self-use during the past 12 month was 5.1%, while those who had utilized at some time prior to the survey were 20.1%. The principal symptoms of the users were low back pain(54.3%), shoulder stiffness(37.0%) and knee pain(14.0%) and those who satisfied with the treatment for these symptoms were 64.4%, 70.0% and 67.7% respectively. Answers to the question which asked influence on COVID-19 pandemic on the visit of clinic included “no influence”(19.3%), “feel anxious but continue”(43.9%), “feel anxious and consider according to the situation”(21.9%) and “suspend visiting”(14.0%).

研究分野：鍼灸学

キーワード：鍼灸 全国調査 利用 満足度 COVID-19

## 1. 研究開始当初の背景

鍼灸治療の利用状況や利用者の特質に関する調査は欧米や一部のアジア圏から複数報告されているが、日本から海外に発信されている情報は限られている。我々は2003年から2007年の5年間にわたり鍼灸治療の利用状況、利用者の特徴や利用目的、治療にかかる費用、再利用の意向などを詳細に調査した（石崎ほか, 2005, Ishizaki et al., 2010）。これら一連の調査から10年以上が経過し、鍼灸業界をとりまく状況は大きく変化した。厚生労働省の令和2年衛生行政報告例（就業医療関係者）の概況によれば、就業中のはり師及びきゅう師の数は2010年から2020年までの10年間で、それぞれ92,421から126,798、90,664から124,956へと直線的に増加し、鍼灸施術所数も21,065から32,103へと増加している。このような鍼灸業界の変化は、鍼灸治療を利用する消費者側の動向や意識にも少なからず影響を及ぼすと考えられる。我々はその後も追跡調査を実施しているが、主な利用目的となる運動器疾患の細分や満足度、利用者の意識等については十分に検討できていないことから、新たな調査を計画するに至った。さらに、2020年以降はCOVID-19の感染拡大により、鍼灸治療利用者の意識は少なからず影響を受けていると考えられるがその実態は確認できていない。

## 2. 研究の目的

本研究では改めて全国規模の調査を行い、鍼灸利用状況と満足度、及び利用者の意識を把握するとともに、COVID-19の感染拡大が受療行動や意識に及ぼす影響を調査することを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1)対象及びサンプリング

2021年3月の時点における、全国20歳以上の男女個人を対象として、住宅地図データベースを用いた層化3段無作為抽出法によりサンプリングを行った。全国を12のブロックに分類し、さらに都市規模別に21大市、その他の市、郡部に分け、各ブロック・都市規模で分けた層における20歳以上人口の大きさにより4,000の標本を比例配分した。各層の調査地点数は、各層における推定母集団の大きさから標本数を比例配分し、1地点の標本数が25程度になるよう調整し、全体で157地点とした（1段目）。調査対象となる世帯は、住宅地図データベースを用いて調査開始地点より3軒おきに抽出し（2段目）、対象世帯の一人に接触できたら、20歳以上の家族の中から割り当てに該当する対象者を選んで対象者とした（3段目）。調査対象とした人が不在の場合、在宅している時に再度訪問し、不在の対象には最低3回は訪問した上でどうしても依頼ができない時に調査不能と判断した。

### (2)調査項目

本調査における調査項目は、回答者の基本属性（年齢、性別、職業、学歴、都市規模）の他、①鍼灸治療経験、②治療を受けた施設の種類の、③治療の目的（症状）、④治療に満足した症状、⑤利用のきっかけ、⑥過去1年間の鍼灸治療費用、⑦今後の利用意向と理由、⑧経験者の継続や再受療意向へのCOVID-19の影響と実態、⑨未経験者に対して未経験の理由と今後の受療意向へのCOVID-19の影響、⑩鍼灸以外のCAMの利用状況、⑪過去1年間の医療費及び市販薬にかけた費用、⑫世帯の構成および世帯収入などとした。

### (3)統計処理

年齢は、中央値と四分位範囲（IQR）、および3段階の層別の頻度とパーセンテージで表した。性別、学歴、及び都市規模については各層の頻度とパーセンテージで表した。鍼灸治療経験の有無による各基本属性の差異は、Mann-Whitney検定（年齢）、Fisherの直接検定（性別）および $\chi^2$ 検定（学歴、都市規模）によりそれぞれ検定した。

### (4)倫理的配慮

本調査は、国立大学法人筑波技術大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号2020-26）。尚、個人情報取り扱いについては、本調査を委託した中央調査社の倫理規定に基づいて厳重に管理されている。

#### 4. 研究成果

調査対象者 4,000 名中 1,207 名（有効回答率 30.2%、男性 572 名、女性 635 名）から回答を得た。表 1 に、鍼灸治療経験の詳細を示す。回答者 1,207 名中、セルフケアを含めて過去に 1 度でも鍼灸治療を経験したことがあると回答した者は 243 名（20.1%）で、その内、通院中の者や、セルフケアを含めて 1 年以内の鍼灸治療経験を有する者は、全体で 62 名（5.1%）であった。

表1 鍼灸治療経験の状況

経験別	全体 <sup>1)</sup>		女性		男性	
	人数	% <sup>2)</sup>	人数	% <sup>2)</sup>	人数	% <sup>2)</sup>
現在通院中	24	1.99	16	2.52	8	1.40
1年以内に受療	27	2.24	10	1.57	17	2.97
1年以上前に受療	149	12.34	85	13.39	64	11.19
自分でした(1年以内) <sup>3)</sup>	12	0.99	6	0.94	6	1.05
自分でした(1年以上前)	34	2.82	20	3.15	14	2.45
経験なし	951	78.79	490	77.17	461	80.59
わからない	13	1.08	8	1.26	5	0.87

1)対象者総数:1,207名(男性572名、女性635名)。重複回答した3件を含む。

2)各列の対象者総数を分母として算出。

3)1名は「1年以内に受療」と重複しているため、「現在通院中」と、「1年以内に受療」、「自分でした(1年以内)」の回答者の合計は62名(5.1%)。

表2 鍼灸治療経験別の基本属性

	全体	鍼灸治療経験別 <sup>1)</sup>	
		なし	あり
人数	1,207	951	243
% <sup>2)</sup>	100.0	78.8	20.1
95%信頼区間	-	76.4-81.1	17.9-22.5
性別(M/F)	572/635	461/490	106/137
%(F) <sup>3)</sup>	52.6	51.5	56.4
年齢	56(41-71) <sup>4)</sup>	54(39.5-70)	62(49-73)
20-39	271(22.5) <sup>5)</sup>	238(25.0)	29(11.9)
40-59	398(33.0)	314(33.0)	82(33.7)
60<	538(44.6)	399(42.0)	132(54.3)
学歴 <sup>6)</sup>			
短大/大学	554(45.9) <sup>5)</sup>	422(44.4)	126(51.9)
高校	553(45.8)	449(47.2)	98(40.3)
中学	97(8.0)	79(8.3)	17(7.0)
都市規模			
大都市	333(27.6) <sup>5)</sup>	265(27.9)	68(28.0)
その他の市	760(63.0)	588(61.8)	159(65.4)
町村	114(9.4)	98(10.3)	16(6.6)

1)治療経験不明の13名を除く1,194名の内訳を示す。

2)分母は1,207として算出した。

3)女性の割合を示す。

4)中央値(四分位範囲)。

5)各層別の人数と割合を示す(各列の合計を分母として算出した)。

6)学歴不明の3名を除く1,204名の内訳(治療経験不明者の内訳は、短大/大学6名、高校6名、中学1名の計13名)を示す。

受療施設別では、鍼灸専門の治療院が 57.6%で最も多く、次いで鍼灸接骨院が 27.2%、病院が 7.4%の順であった。治療のきっかけは、家族や知人の紹介が 44.4%で最も多く、次いで「鍼灸治療施設を見て」が 13.6%、「医師のすすめ」が 13.2%、「病院の治療や検査では不十分」が 11.5%の順であった。

表2には、鍼灸治療経験別の基本属性を示す。男女別では、女性全体の 21.6%、男性全体の 18.5%が経験を有しており、女性に経験者が多い傾向にあったが男女間で有意差は認めなかった ( $P=0.195$ )。年齢では特に 60 歳以上の層で経験者が多く、年代層別の割合 ( $P<0.001$ ) 及び中央値 ( $P<0.001$ ) のいずれの比較においても有意差を認めた。学歴別では、各層における経験者の割合は、それぞれ、短大/大学卒業で 22.7%、高校卒業で 17.7%、中学卒業で 17.5%と、短大又は大学卒業の層において経験者が多い傾向にあったが有意差は認めなかった ( $P=0.091$ )。都市規模別においても、鍼灸治療経験別の有意差は

認めなかった (P=0.201)。

表3には、鍼灸治療経験を有する 243 名を対象に、鍼灸治療の目的とした主な症状 (複数回答可) と、治療に対して満足した回答者の割合を示した。鍼灸治療の目的となった症状で最も多かったのは腰痛 (54.3%) で、次いで肩こり (37.0%)、膝痛 (14.0%) の順であった。また、これらの症状に対する鍼灸治療に満足した回答者の割合は、腰痛で 64.4%、肩こりで 70.0%、膝痛で 67.7%であった。

表3 鍼灸治療の目的と満足度

症 状 <sup>1)</sup>	人数	% <sup>2)</sup>	治療に対する満足	
			人数	% <sup>3)</sup>
腰 痛	132	54.3	85	64.4
肩こり	90	37.0	63	70.0
膝 痛	34	14.0	23	67.7
肩 痛	23	9.5	15	65.2
神経痛	15	6.2	5	33.3
足のしびれ	13	5.4	5	38.5
頭 痛	12	4.9	10	83.3
疲労倦怠	10	4.1	6	60.0
スポーツ障害	8	3.3	5	62.5
健康増進・リラックス	7	2.9	6	85.7
胃腸が悪い	7	2.9	4	57.1
その他の関節痛	6	2.5	4	66.7
手のしびれ	6	2.5	3	50.0
眼の疲れ	5	2.1	2	40.0
耳鳴り・難聴	2	0.8	0	0.0
排尿異常	2	0.8	1	50.0
麻 痺	1	0.4	0	0.0
美 容	1	0.4	1	100.0
その他	26	10.7	13	50.0
わからない	2	0.8	0	0

1)複数回答可として質問した

2)過去に鍼灸治療経験を有する 243 名を分母として算出した。

3)各症状を選択した回答者数を分母として算出した。

表4 COVID-19 と受療意向

受療意向	人数 <sup>1)</sup>	%
全く気にならない	22	19.3
少し気になるが治療を受けたい	50	43.9
気になるので治療を受けるかは状況次第	25	21.9
気になるので当面は治療を受けない	16	14.0
その他	0	0.0
わからない	1	0.9

1)鍼灸治療の経験を有する者のうち、再利用の意向を示した 114 名を対象とした。

鍼灸治療経験者に対して、再利用の意向を尋ねた結果では、「続けたい」と回答した者が 46.9%、「続けたくない」と回答した者が 35.8%、「わからない」と回答した者が 16.5%であった。また、継続意向を示した 114 名に対して、理由を尋ねた結果では、「効果があるから」が 78.9%で最も多く、次いで「気持ちがいいから」が 28.1%、「手軽にできるから」が 11.4%、「副作用がないから」11.4%の順であった。一方、再利用の意向を示さなかった 87 名に対してその理由を尋ねた結果では、「効果が無いから」が 39.1%で最も多く、次いで「治療に時間や手間がかかるから」が 13.8%、「治療費が高いから」が 12.6%

の順であった。

鍼灸治療未経験者（および経験不明者）964名を対象として今後の受療意向を尋ねた結果では、「受けてみたい」と回答したのは9.8%で、「受けたくない」と回答したのは81.0%であった。また、「受けてみたい」と回答した94名に、今まで受けたことがない理由について尋ねた結果、「受けに行く時間の余裕がない」が27.7%、「治療費がいくらかかるかわからない」が21.3%、「近くに治療を受けられる場所がない」が18.1%であった。

表4には、鍼灸治療経験を有する243名のうち、再利用の意向を持つ114名を対象として、COVID-19の影響について尋ねた結果を示す。将来の鍼灸治療受療に際して、COVID-19が「全く気にならない」と回答したのは19.3%、「少し気になるが治療を受けたい」と回答したのは43.9%であり、合わせて63.2%が、COVID-19の影響下でも受療を継続する意向を示した。それに対して、「気になるので治療を受けるかどうかは状況次第」と回答したのは21.9%、「気になるので当面は治療を受けない」と回答したのは14.0%で、36.0%は、受療行動に影響を受けると回答した。さらに、鍼灸治療経験者全員（243名）を対象として、実際にCOVID-19の影響で受療を控えた経験があるかどうかについて尋ねたところ、「治療をやめた」と回答した者が6.6%、「一時的に中断した」と回答した者が5.8%、「治療の回数を減らした」と回答した者が6.6%（うち1名は中断と重複回答）、「通院せず自宅ですることにした」と回答した者が2.1%で、合計20.6%が、何等かの形で受療行動を変更したと回答している。

さらに、2022年8月に実施した追跡調査（有効回答率30.0%）において、過去に鍼灸受療経験を有すると回答した216名を対象として、COVID-19の影響を尋ねた結果、「全く気にならない」と回答した者は28.7%、「少し気になるが治療を受けたい」と回答した者は24.1%、「気になるので治療を受けるかは状況次第」と回答した者は14.4%、「気になるので当面は治療を受けない」と回答した者は20.8%であった。

今回の調査の結果、鍼灸治療の利用率は、2017年度以降に報告されている数値と比較して明らかな差異は認められなかった。また、鍼灸治療の受療目的となる愁訴については、腰痛、肩こり、膝痛等の筋骨格系愁訴が上位を占めていおり、いずれも60%以上の利用者が治療に対して満足したと回答している。その他多くの愁訴についても利用者の50%以上が満足したと回答していることから、鍼灸治療利用者の満足度が高い傾向は過去の報告（高野ほか、2002、加藤ほか、2017、Ishizaki et al., 2018）と同様の傾向であった。しかしながらその一方で、治療を継続しないと回答する者が一定以上認められた。非継続の理由の第一は「効果がない」であったが、その割合は経験者全体の14%にとどまっており、その他の理由として費用や時間、通院環境等が含まれていることから、鍼灸治療のメリットは感じているものの、他の要因で継続をあきらめるケースも少なくないと考えられた。これらの要因を是正することは、鍼灸治療の潜在的な需要を掘り起こすことに繋がると考えられる。

今回の調査では、COVID-19の感染拡大が、利用者の意識や受療行動に一定程度の影響を及ぼしていることが示された。これは、施術者との接触が多く、小空間で提供される鍼灸治療の施術環境が影響していると考えられた。

## 参考文献

Ishizaki N, Yano T, Kawakita K: Public status and prevalence of acupuncture in Japan. Evidence Based Complementary and Alternative Medicine (eCAM). 2010;7(4):493-500.

Ishizaki N, Fukuda F, Yano T, Selection of healthcare services and satisfaction with acupuncture and moxibustion for musculoskeletal problems in Japan: sub-analysis data from the Nation-wide Cross-Sectional Survey Research. Japanese Acupuncture and Moxibustion. 2018;14(1):8-14.

石崎直人, 岩昌宏, 矢野忠, 小野直哉, 西村周三, 川喜田健司, 丹沢章八. 我が国における鍼灸の利用状況に関する全国調査 その1 鍼灸治療の利用状況について. 全日本鍼灸学会雑誌. 2005;55(5):697-705.

加藤竜司, 鈴木雅雄, 福田文彦, 加藤麦, 伊藤和之, 石崎直人. 鍼灸院通院患者の受療状況と満足度に関する横断研究. 全日本鍼灸学会雑誌. 2017;67(4):297-306.

高野道代, 福田文彦, 石崎直人, 矢野忠. 鍼灸院通院患者の鍼灸医療に対する満足度に関する横断研究. 全日本鍼灸学会雑誌. 2002;52(5):562-574.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石崎直人、山下 仁、矢野 忠
2. 発表標題 鍼灸治療の利用と満足度に関する全国調査 - 2021年4月調査の結果より
3. 学会等名 第72回全日本鍼灸学会学術集会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山下 仁  (Yamashita Hitoshi)		
研究協力者	矢野 忠  (Yano Tadashi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------